

北陸の伝承と人間像をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-10-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤島, 秀隆 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00064298

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



北陸の伝承と人間像をめぐる

藤 島 秀 隆

はじめに

金沢古典文学研究会の同人であった故原田行造氏、藤本徳明氏、青山克彌氏、筆者の四人の共著に『北陸の伝承と人間像——歴史を彩った主人公たち——』（昭和55年11月北国出版社刊、以下本書と言う）がある。幸い読者の好評を博して再版されたが、現在は品切れ絶版となっている。本稿では原田氏を追悼して、言わば原田氏好みのテーマの中から厳選して、芋掘藤五郎、佐々成政、安宅の関址と富樫、更に本書の収録に漏れた齋藤別当実盛等の伝承について若干の考察（補遺）を試みたものである。

一 『藤五物語』をめぐる

芋掘藤五郎譚（普話「芋掘り長者」型）は諸伝承あるが、最も典型的と言われているのが、金沢市立図書館加越能文庫蔵写本の『藤五物語』である。

この物語は加賀藩の郷土史家として著聞する森田平次（諱は良見、柿園と号した。明治四十一年十二月没、八十六歳）の編・自筆による『松雲公採集遺編類纂』、（別名『松雲公遺編古文類纂』）全一九〇冊の中に収録されている。『加越能文庫解説目録』（上巻）によると、『松雲公採集遺編類纂』は、「加賀藩五代藩主前田綱紀（松雲公）が、古人の著書や多くの資料を採集し秘笈蔵

書と称したが、明治初年その多くを散逸し遺されたものを森田平次が十六に類別した」ものである。

『藤五物語』は美濃紙袋綴、縦二三・五寸、横一六・八寸、表紙・裏表紙は薄茶色、やや濃い茶色のケースに収められている。ケースの大きさは、縦二六・五寸、横二〇・五寸である。『藤五物語』が収載されている冊子の表紙左側の題簽には、「松雲公採集遺編類纂一七五 詞花」、更に表紙中央にも「詞花」と紙片貼布の上にそれぞれ墨書してある。ちなみにこの詞花部一冊には十一編が収録されている。丁数は、一丁裏から始まり九丁表まで記されており、行数は片面八行書きである。『藤五物語』は詞花部（一冊）の五番目に収録されているため、一丁表は他の作品の巻末がしるされている。一丁裏の中央部に藤五物語と墨書してあり、二丁表の冒頭部に「此物語作者未詳、加賀国古伝話也」と二行にわたり記述されている。著者並びに成立年代は未詳であり、奥書もない。小倉学博士のご教示によると、『藤五物語』の写本が金沢神社にも所蔵されており、卷子本一卷、巻頭に「紀良見」の朱印が捺されている。森田平次が明治十二年五月に金沢神社に奉納したもので、書写年代もその頃と推定³しておられる。

『藤五物語』によると、藤五（他書では藤五郎）は加賀介藤原ながしの末裔といわれ、加賀国石川郡の地に住み、故郷にちなんでその里の名を山科と名づけ、芋掘りを職業としていた。あるとき、大和の国初瀬の長者生玉の方信夫妻が初瀬観音の申し子和孩子を伴なって訪れ、観音の夢告だからと夫婦

にする。ある日、方信より黄金こがね一袋を贈ってきたが、無欲恬淡な藤五は田圃に降り立つ雁を見つけ、黄金の袋を投げ捨てる。妻が嘆き悲しむと、藤五はいつも掘る芋の根に繰らでも黄金があると言ひ、掘ってきた黄金を沢で洗った。後にその沢は金洗沢と呼ばれた。

また、大晦日の夜、黄・白・黒の三頭の小牛が藤五の家の軒下に現われる。翌朝見ると、金銀鉄の三つの兜だったので仏像を造らせて、これを本尊とする一寺を建立して伏見寺と名づけた。また、藤五夫妻が死後に葬られた墓をふたご墳と呼んでいる。そして最後に藤五の節操をたたえる四首の歌をもって結んでいる。初めの一首が、「むさはらぬ心の土のたねよりぞ、こがねの花はさばに咲ける」と言うのである。

さて、芋掘藤五（郎）譚の発生と流布の時期はいつであらうか。

諸書に採録された伝承を溯及して、祖上に載せることは可能である。菅見によると、藩政時代から昭和初期に至るまでに執筆（後に公刊）された縁起及び地誌類は、十九種類現存している。とりわけ、諸伝承を収載しているのが、『金沢古蹟志』・『加賀志微』・『稿本金沢市史』（市街編第一）等である。藤五郎譚の所収本を次に表記した。

「芋掘藤五郎譚」所収本一覽表

番号	書名	巻冊数	著者	成立（執筆）年代
①	藤五物語	一卷	著者未詳	末詳
②	行基山伏見寺縁起	一卷	伏見寺・快存	元和三年（一六一七）
③	拾纂名言記	二冊	毛利詮益	天和二年（一六八二）
④	寺社由緒書上（伏見寺）	一編	伏見寺・快儀	貞享二年（一六八五）
⑤	加越能旧跡緒 <small>（のち加能越金砂子）</small>	一冊	著者未詳	寛文十年（一六七〇）から元禄十三年（一七〇〇）の間に成る。

⑥	金陵地名考	一冊	著者未詳	元禄十二年（一六九〇）頃か
⑦	加州金沢石浦山長谷観音縁起	一卷	心蓮台沙門月海	天正の兵火で焼失のち、享保十二年（一七二七）作成
⑧	越登賀三州志・来因概覽附録卷之一	六編	富田景周	来因概覽は、寛政十一年（一七九九）の脱稿
⑨	加賀古跡考	一冊	楠部肇	文政三年（一八二〇）以前成る
⑩	金沢紀事	四冊	富田景周	文政六年（一八二三）
⑪	金城靈沢碑文	一基	津田鳳卿他	天保十五年（一八四四）
⑫	亀の尾の記	十一卷	柴野美啓	弘化四年（一八四七）以前成る
⑬	金沢古蹟志	三十四卷 <small>（三十七巻）</small>	森田柿園	三十四巻は明治十三年（一八八〇）三十七巻は明治三十二年（一九〇一）柿園の没後、昭和十二年（一九三七）外行吉が整理したもの。
⑭	加賀志微	十三巻	森田柿園	明治二十七年（一八九四）
⑮	金城勝覽図誌	二卷	平岩晋	明治三十二年（一八九八）
⑯	加能宝鑑	一冊	渡辺市太郎	大正五年（一九一六）
⑰	稿本金沢市史（市街編第一）	一冊	和田文次郎	昭和六年（一九三一）
⑱	三州遺事	一冊	黒本稜堂	未詳（『加賀志微』所引）
?	三州名蹟誌	?	著者未詳	未詳（『加賀志微』所引）

次に右の一覽表収載の主な諸書の伝承を略述しよう。

③『拾纂名言記』（別名『御名言記』）の作者は加賀藩士で、第三代藩主前田利常に仕えた子小姓（奥小将）である。作者の毛利準之助詮益は十三歳（寛永十八年）から三十歳に至る十八年間仕え、その間に利常の事蹟について直接に見聞したところを記録し、後に一書にまとめたのが本書である。貞享四年（一六八七）十二月五十九歳を以て没した。本書は、夜話のうちで価値の高いものと言われている。

私に曰、当処金沢と申て南の矢倉の下に泉水あり。昔此処を金洗沢と云。

末の世に洗といふ字を略仕、金沢といふとも承。又いも掘藤五郎と云者、此沢にて金の砂を掘出すにより金沢共申也。(『御夜話集』上編、石川泉圖書館協会刊本による。)

右の伝承によると、金沢地名起源に伴う藤五郎の話と名は、つとに前田利常及びその側近者たちは存知していたと推測できる。一方、藩命によって寺院においても由来書が作成され、寺社奉行に提出されている。

『貞享二年寺社由緒書上』(真言宗伏見寺の条)には、

当寺開闢者、人王四拾四代元正天王御宇養老元年ニ当国石河郡伏見山峯掘藤五郎与申卑賤之老翁有。日夜著撰掘為宮。然掘出所悉皆雖黄金、是不知宝与唯忙。然有夜夢中一人之僧来而告而云、汝明朝著撰掘時黄金交一寸八歩闊浮檀金之薬師如来可掘出。如此告有而翌日晝撰掘出ニ如夢之後尊像掘出、伏見山結草庵礼拜奉敬。而後天平勝宝年中行基菩薩当国登伏見山奉拜薬師如来、末世希有之発意、願彼藤五郎掘出所之金子を以、奉鋪立七寸三步之薬師如来、其林中に籠入闊浮檀金之薬師、則令建立堂舍改寺号山号、而号行基山伏見寺。其以後者年久及破壊之処、当国之住人富盛入道仏誓彼薬師如来崇敬、伏見山而建立伽藍佛依也。其以後年久中絶、右之伽藍致破壊、漸本尊斗伏見山相残有之処、瑞竜院棟御代元年中、当寺五世以前之住持快存と申僧唯今之屋敷拜領仕、安置彼薬師如来申候。養老元年ヨリ当歳ニ至迄九百六拾九年罷成候。伏見山之縁起中頃焼失仕候由代々申伝候。(『加越能寺社由来』上巻、石川県図書館協会刊による。)

と記載されている。芋掘藤五郎伝承の古形及び伏見寺を中心とした伝承とその背景、更に、石浦山長谷寺の観音由来譚の周辺等の説明は、夙に故原田行造氏によって行われ、詳述されている。したがって、本稿では視点を變えて、芋掘藤五郎譚における申し子ヒロインの出自のくだりと観音信仰に焦点を定

め、私見を述べてみよう。

藤五郎の妻は押し掛け女房となった大和国長谷寺観音の申し子(和子)、『越登賀三州志』では和五)である。物語のヒーローやヒロインが申し子型として顕著なのが中世の御伽草子の世界である。御伽草子では出自の由来、両親(もしくは片親)の神仏等に対する申し子祈願、子とは何か、夢中の託宣、神靈物の下賜、そして靈驗奇瑞の段階を経て北の方(妻)の懐妊、申し子の誕生、名付けの由来等という順序で構成されている。このような御伽草子型の条件を『藤五物語』に照射すると、記述が簡単であり、一向に面白味がない。

爰に大和の国初瀬の里に、名をば生玉の方信といふ人ありけり。此人家富て、多くの宝はもてりけれど、子なき事をなん常に歎きたりける。あるとき初瀬寺にこもりて、その事をうれへ申たりける。ころろざしのせちなるを、仏やあはれとおぼしたりけん。ほどなくひとりりの女の子をなまうけたりける。名をば和子としも呼て、かぎりなくよるこびぞたしたりし……(下略)

というのである。一方、⑨『加賀古跡考』では、長者の生玉方信夫妻が子のないことを憂えて、夫婦共に長谷観音に参籠し「一子を与へ給へ」と熱心に祈願して、間もなく授けられた子と記され、夫妻の切実な願望がかなり描写されていると言えよう。和五は玉のような美女で、女の道を教えないのに全て知り得ていた。長谷観音の申し子なので婿を迎えるのも嫁に行かせるのも観音の夢告に従うという徹底ぶりである。ことさら長谷観音の靈験を強調している。

一般に、清水観音のように男が申し妻を祈願するので、妻観音と呼ばれる異称があるが、これは「申し子」から「申し夫」という型式なのである。⑩の『伏見寺縁起』では、長者が「年四十にあまりて、いまだ子なき事を憂ひ」

長谷観音に祈願する。夫または妻が四十に余るまで子がなかつたが、神仏に祈り子を儲けた語りは御伽草子型を踏襲していると言える。和子と名付けられた娘は「風姿美艶にて、心操清潔なればとて」人びとは美清女と呼んだというのである。

『伏見寺縁起』も『古跡考』と同様に夫妻が常に娘に良き夫を授けて欲しいと長谷観音に祈願するのである。長者の娘が美清女と呼ばれたことは、⑦『石浦山長谷観音縁起』も同様である。しかし、娘の父親は松浦氏で世人は万倍長者と呼んでいたとある。この縁起は漢文体で叙述されており、長谷観音の来歴が詳述されている反面、物語の面白さがさほどないという感みがある。⑧『三州志来因概覽』は簡潔な文章であるが、難語の使用が著しい。申し子祈願も「居恒子なきを恨んで、長谷の観世音に祈り、一女子を産することを得たり。其女美にして艶也。名を和五と呼ぶ。」というぐあいである。

藤五郎譚は元来、探鉱者や鑄物師関係者によって語られ、もたらされた話と言われ、民俗学者の柳田國男氏は「イモは鑄物師のイモである。鑄物師も鍛冶も等しく金屋と呼ばれ、金屋神はその共同の守護神であった。」(『炭焼小五郎が事』、『海南小記』所収)と指摘し、更に、鑄物師や鍛冶が炭焼きと深く関係することを示唆している。特に、本話は昔話「炭焼き長者」及び「芋掘り長者」の話が根底に流れており、その上に寺院縁起が挿入されて伝説化して、本話が形成されたものと考えられる。本話の伝承と伝播を考える一つの目安は、長谷寺観音が強調され語られている点にある。端的に言えば、本話は宗教的縁起の過程で、恐らく女性の唱導説経者(長谷観音の宣布者)が介在し、もたらされたのではないかと考えている。文学化された縁起が伏見寺や石浦山慈光院(長谷寺)等に確立された後は、代々の住僧の口伝として語られて来たと言えらる。例えば、江戸時代、金沢における西国三十三所観音順礼の第十四番札所が伏見寺であった。また、大和國長谷寺、

金沢の行基山伏見寺、石浦山長谷寺(慈光院)は、共に真言宗である。真言宗寺院の活動及び寺院縁起に基づく喧伝が、本話の伝播に大いに貢献していると思われる。寺院側からの流布は、『貞享二年(一六八五)寺社由緒書上』が成立した以後に始まると考えている。その一方、加賀藩前田家の藩主及び側近者を中心とする人々によって、金洗沢(金城靈沢)にまつわる伝承が武士の階層に広められて行ったと言えるのではあるまいか。その時期が、『越登賀三州志・来因概覽』が脱稿された寛政十一年(一七九九)あたりからと考えている。

本話の主人公藤五郎は無欲で正直者である。妻の持参した財宝や黄金は貧しい人々に分け与えた。物質優先主義を否定し、拜金主義を批判している。藤五郎の生き方は現世においても光彩を放っている。また、内助の功を遺憾なく發揮した妻の生き方も賞賛に値する。

それにしても、芋掘り藤五郎譚をめぐる諸問題の一点は黄金(砂金)が重要な役割を示していることにある。金沢市街地を貫流して日本海に注ぐ犀川の最上流域に、藩政時代金銀を産出する倉谷鉱山があった。元和・寛永頃(一六一五~一四四)が最盛期で、家数二百軒を数えたと言われ、正徳四年(一七一四)に廢絶している。犀川上流域にある金沢市小原町とその周辺部の集落に居住する古老の伝承によると、芋掘り藤五郎譚と倉谷鉱山の金とが結び付けて語られている。奇妙なことは、藤五郎譚が諸書に記録され始めた十七世紀前半期と、倉谷鉱山の全盛期が合致するのである。したがって本話の形成と伝播に倉谷鉱山の関係者が介在していると想定したいのである。

二 佐々成政と黒髪の怨念

兼好法師の著作『徒然草』(第九段)には、女は髪が立派であつてこそ、

人の目をひきつけるようである。更に、「女の髪すぢをよれる綱には、大象もよくつながれる」と記されているが、これらは女性の魅力の強さを強調しているのである。

古来、俗説として「髪は女の生命」といわれ、「緑なす黒髪」「髪はからすのぬれは色」などと称されて、漆黒の髪が歓迎されたのである。これらのことは美人の評価の一つとされて来た。例えば、美人のほまれ高い「お市の方」(織田信長の妹)の肖像画(持明院所蔵)を見ると、耳を現わした垂髪が肩のあたりに幾条にも髪筋が切りさげられている姿は、ほればれとする。しかし、黒髪の美女は薄幸な生涯を突如終え、怨念を残すのである。

その一つの話が、富山県を中心として全国に流布している佐々成政と早百合の伝承である。

藩政時代に加賀・能登・越中の三國で語られた奇談・怪談を収録した金沢の俳人、堀麦水(天明三年(一七八三)没)の著『三州奇談』巻五に「妬氣成盛」と題した奇怪談が載っている。

天正年間、織田信長の武将であった富山城主佐々成政は、信長が本能寺で横死後、豊田秀吉を嫌悪し徳川家康と手を結んで、秀吉を討とうと計画、嚴冬の佐良良峠越えを決行し、浜松城主の家康を訪ねた。が目的を果さず帰国後、愛妾早百合が小姓竹沢某と不義密通し懐妊していると、他の側室から聞いて成政は激怒した。これは、成政の寵愛を一身にあつめた早百合を嫉妬したあげくの讒言であった。成政は竹沢が浜松行きに病氣と称して随行しなかつたので、讒言を信用し即刻、竹沢を庭前で斬殺した。早百合の長い黒髪を手に巻き引き下げ、神通川べりに連れ出し、早百合の髪を逆手に取って引き下げ殺した。川そばの柳の垂れ枝に彼女の黒髪を結び、切り落としした首をつるしたという。そのそばで無実の罪を激怒しのしる早百合の一族十八人を皆殺しにして、獄門首とした。惨殺された早百合と一族の恨み、怨霊、さ

らに早百合の黒髪の怨念は、以後の成政にたたり遂には滅ぶのである。

これらのことは大同小異ながら『太閤記』にも伝えられている。一方、越中の伝承によると、早百合といひ五福の産で、密通の相手とされた小姓は岡島金一郎という。早百合は神通川磯部の堤の一本榎の下に連れ出され、逆さ吊りにされ、鯨鱗斬りに処刑されたと伝えられている。死に臨んで早百合は「立山に黒百合が咲けば佐々家は滅亡する」と絶叫して呪いながら死んだという。

その後の成政は早百合のたたりで秀吉に敗れ、のち許されて九州の肥後に転封となった。が秀吉の機嫌を損い、北の政所に取りすがり立山(一説に白山)の珍花黒百合を献上した。秀吉の愛妾淀君も政所に対抗して黒百合の花を集め生花の会を催した。以後、成政は北の政所にも疎まれ、肥後一揆の不始末など失政を追及され、秀吉の命により自刃して果てたというのである。成政の滅亡は早百合らの怨霊と黒髪の呪力にもとづく怨念のなせる業と伝えられている。

藩政時代になっても、早百合の亡霊は雨天の時に「ぶらり火」(鬼火)として神通川沿岸に出現し、ぶらり火の形は「女の首を髪を取りて引きさげた有様似たり」と『三州奇談』は記している。女の執念、黒髪の怨念は必ず相手を呪い殺すという典型的な伝説として広く流布している。

三 白髪の耐と実盛首洗池

寿永二年(一一八三)六月、加賀の篠原合戦で討死にをとげた平家方の七十歳を越す老武者、奇藤別当実盛の最後譚は、人びとの心を持った哀話として、人口に膾炙している。『平家物語』(巻七)によると、実盛は白髪を黒く染めて、大將軍の扮装である赤地の錦の直垂に萌黄緋の鎧甲を着用して、切

班の矢を背負い、ただ一騎奮戦し、木曾義仲軍の手塚太郎光盛に討たれたという。実盛は義仲が二歳の時に命を助けてくれた恩人である。手塚の持ち来った首を一目見た義仲は、「あわれ実盛よ」と思い、黒髪と黒ひげに不審を抱いて、かねて実盛と旧知の樋口次郎兼光を呼ぶ。兼光は「髪は黒いのは日ごろ実盛が老武者と侮られないように黒く染めて若々しくするのだ」といつていたと物語った。そこで首を洗って見ると果して白髪になった。錦の直垂は、京出發の時に、実盛はもと越前国の者であり、故郷には錦を着て帰ろうと願ひ、平宗盛の許しを得たものである。伝承によると、その後義仲は塚をきづいて実盛の遺骸を手厚く葬ったという。

毛染めは本来、化粧の一種として白髪を黒く染めることを目的として始まったといわれている。もちろん「若返る」ことがねらいであろう。実盛の首級を洗ったとされる首洗池（加賀市手塚町）は柴山潟のほとりにおいて、池の前に松尾芭蕉の詠んだ「むざんやな甲の下のきりぎりす」の句碑が立っている。

しかし、鬘や鬘を洗うことに関して、『平家物語』（流布本）にはその場所が池もしくは潟なのか不詳である。『源平盛衰記』（巻三十）には、兼光が水を取り寄せて自身で鬘染めの髪を洗ったら「白髪の尉」になったと記されている。一方、郷土の伝承では潮津潟の水で洗ったと伝えられている。恐らく義仲軍の首実検場に近い潟の水を汲み洗ったのであろう。

江戸時代の享和三年（一八〇三）頃の成立と考えられる塚谷五明の著『菱叢紀聞』には「実盛がびん洗池」と見え、更に「首かけ松」・「実盛塚」（加賀市篠原新町）が記されているが、いずれも興味ある伝承である。また、実盛が白髪を鬘染めにした際に、顔を写したと伝える鏡を池中に納めている「鏡の池」（加賀市深田町）の伝承も同書に記してある。それによると、「村の中に鏡が池と言ふあり。池中に鏡一面あり。指渡し三寸許にして柄なし。

裏に鶴亀の模様あり。甚古鏡なり。此の鏡実盛池中へなげ込みしと言ひ伝ふ。」と見える。今では小池のそばに「実盛投鏡之池」の石碑が立っている。

次に、実盛没年から二百年後には世阿弥の作と伝える修羅能「実盛」が演じられている。金井清光氏のご指摘（国文学解釈と鑑賞、昭和52年2月至文堂刊参照）によると、能「実盛」は応永二十一年（一四一四）三月、篠原において相模国遊行寺の十四代太空中人が、討死にした実盛の亡霊を濟度した故事にもとづいて作られたという従来の定説に対して、篠原に実盛の霊を弔った最初の遊行上人は十四代太空中ではなく、十一代自空であり、それは康応二年（一三九〇）三月、実盛の二百年遺忘のことであると説いておられる。

能「実盛」では「見るや姿も残りの雪の、鬘白き老武者なれども、その出立は花やかなる」実盛が亡霊として遊行僧の回向を受けるのである。次いで、柳の木蔭の池の水で緑の黒髪をくしけずり、鬘を洗ったら鬘が流れ落ちて、元の白髪となったと語られている。従って、「首洗池」と称するようになったのは、恐らく能「実盛」頃からと考えてよいであろう。今日では実盛伝承は、時宗信仰及び虫送りという農民たちの信仰が付会されている。

四 安宅の関址と鬘塚をめぐって

- 松たてる安宅の砂丘その中に清きは文治三年の関
 - 義経記の作者も聞きしこちするよき北海の波の音かな
 - 鬘を逃せる関所下なるは木曾の冠者の西したる路
 - 住吉の神をかしくみ退きて富樫のすゑし新関のあと（与謝野晶子）
- 右の四首は昭和八年秋、夫の寛（鉄幹）と共に、安宅の関址（石川県指定史跡）を訪れた時に詠んだ歌である。貴種流離のヒーロー源義経を中心とする、一大ドラマに思いを寄せて詠んだ一連の作品で、作者の安宅伝説に対す

る強い興味を看取することができる。

安宅を代表する短歌「松たてる」の歌碑は、日本海の波打ちぎわから約百メートルほど離れた二堂山とよばれる小高い砂丘の松林の中に立っている。近くに安宅住吉神社が鎮座し、関の宮・弁慶逆植の松などがある。歌碑の左手の方に「安宅の関址」の石標(高さ二メートル三〇センチ、四角の凝灰石)が建ち、また、歌碑の前方、海岸寄りに弁慶、富樫の銅像がある。

昭和十五年秋、故永井柳太郎の肝煎で、現在地より東方二百八十メートルの平地に九谷焼の原料陶土を用いた、巨大な陶像が建設されたのであるが、長年の風雪や心ない人の投石で傷んだため、昭和四十一年銅像(日展作家都賀田勇馬氏の製作)として安宅の関址に再建されたものである。富樫像の台石には寄進者永井柳太郎の筆になる智・仁・勇の碑文が刻まれている。弁慶の忠義智勇、富樫の仁情、そして義経の忍耐が安宅伝説の特徴と言えよう。

源義経をめぐる安宅伝説の発生地、「安宅」と言えは往古言追であり、『延喜式』では安宅駅が設置され、特に平安から鎌倉・室町時代にかけて軍事上重要な位置を占めていた。『源平盛衰記』巻第二十八によると、「安宅・安宅湊・安宅の渡・住吉の浜・安宅城」などの地名が文献上の初見である。しかも、寿永二年(一一八三)五月、木曾義仲追討のため、平維盛を総大将とする平家の大軍が北陸へ進取した際、義仲によしみを通じた林・富樫の加賀武士団が敗北を喫したのもこの地である。

更に、俱利伽羅峠の合戦で大勝した義仲軍が怒濤の如く南下し、必死に防禦する平軍を、粉砕したのも安宅、篠原の砂丘地と平原においてであった。この安宅に関わる人物は奇しくも敗将となる運命を辿るのである。例えば、義仲、義経がそれであり、弁慶、更に富樫氏の末路も悲哀に満ちている。義仲は近江国粟津で討死、義経・弁慶は奥州衣川の館で亡び、関守富樫の後裔政親は加賀一向一揆の蜂起により滅亡している。

近世(藩政時代)、安宅の関址は海中に没しているという説が流布していたようである。地誌『加越能旧跡緒』(のち『加越能金砂子』元禄十三年(一七〇〇)頃の成立)には、「能美郡安宅浦、於此所昔新関を被建候。今は其関は二三里も沖の海中にあり。松なども有之所、只今は枯木に成有之事。」と見え、次いで安政二年(一八五五)加賀藩士村上生庸の著『三州名跡志』にも、古の関址は海岸を去ること二・三里の海中に沈んで、百年前までは松の枯木などもあったと記されている。しかし、金沢の俳人堀麦水(天明三年(一七八三)没)の著『三州奇談』には「弁慶が越えし新関の跡は何れの地にや。」と懐疑的な見解を示している。

元禄二年(一六八九)七月、俳人松尾芭蕉は『奥の細道』の行脚で加賀路を訪れているが、安宅関址には立ち寄っていない。当時、関址の石標もなく、安宅伝説は巷間に伝播していなかったと考えられる。その主因は藩内における能楽の普及が不十分であることを如実に物語っている。周知の如く、加賀宝生の伝統の基礎を築いたのは前田綱紀(五代藩主)であり、以後、藩内の能楽は宝生流一本に統一され、現在に及んでいる。例えば、貞享四年(一六八七)五月十九日、金沢城内で催された能番組を見ると「安宅」が演能されている。関址が海中に没したと伝える荒唐無稽の俗説は、加賀宝生の興隆につれて発生したのであろう。

次に、能「安宅」の初演の記録は能勢朝次氏の『能楽源流考』によれば、寛正六年(一四六五)三月九日の將軍院参の際の観世の演能である。また、幸若舞の記録は市古貞次氏の『幸若舞・曲舞年表』によると、『言経卿記』天正四年(一五七六)三月六日の条に「アタカ」と見え、『家忠日記』天正七年(一五七九)七月一日の条に「くわんじんちゃう」、更に同八年二月一日条にも「くわんじんちゃう」が上演されており、同八年二月二十五日条には「おひさがし」と記録されている。

能「安宅」の初演記録とされている寛正六年、加賀国守護は富樫政親（第二四代）である。富樫家の内紛が一応和睦によって治まり、加賀国半国守護の成立が文安四年（一四四七）であり、政親は八歳の寛正三年（一四六二）に富樫家を継いでいる。因みにこの政親は、長享二年（一四八八）六月、加賀一向一揆の蜂起により、籠った高尾（多胡とも称す）城が落城して自刃している。したがって、能「安宅」が成立したと考えられる十五世紀中間の富樫氏は室町幕府足利將軍に重用されていた全盛期の富樫氏ではない。端的に言えば衰退の途にある富樫氏を作者は念頭に置いて作成したのではあるまいか。一方、幸若舞「安宅」「勸進帳」「亥さがし」の古い上演記録は今のところ天正四年から同八年にかけてに集中している。「富樫」は下って慶長六年・九年に演じられている。これらの幸若舞は富樫氏の滅亡後に作成されたのではなからうか。

これら諸問題の解明は別稿「幸若舞曲「富樫」とその周辺に譲りたいと思ふ。

注

- (1) 近刊、『金沢の昔話と伝説』（補遺編）所収に翻刻してある。更に、『加賀国石川郡行基山伏見寺縁起』（金沢市立図書館加越能文庫蔵写本）も翻刻し収録した。
- (2) 昭和50年3月、金沢市立図書館編発行、限定版である。
- (3) 「加能民俗研究」第五号所載、小倉孝博士「兼六園と民俗」——俗信の習俗を中心として——参看。昭和52年3月加能民俗の会刊。
- (4) 原田行造氏「金沢と手廻長者伝承」——藤五郎伝説の特徴と成長過程——（金沢大学日本海城研究所報告）第13号所収、一九八一年刊）参看。
- (5) 『角川日本地名大辞典』17「石川県」（昭和56年7月角川書店刊）による。

- (6) 『三州奇談』復刻版、昭和47年6月石川県図書館協会刊本を参看。
- (7) 『麦嵐紀聞』復刻版、昭和46年2月石川県図書館協会刊本を参看。
- (8) 『加能越金砂子』復刻版、昭和45年9月石川県図書館協会刊による。
- (9) 梶井幸代・密田良二両氏著『金沢の能楽』昭和47年6月北国出版社刊、67ページ等参看。
- (10) 第十一章「演能曲目考」一二六二ページ参看。昭和13年11月、岩波書店刊。

- (11) 『中世小説とその周辺』所収、一九八一年十一月東京大学出版会刊。（金沢工業大学教授）

説話・物語論集 第十号 内容

巻頭論文

- 中世文学における人間理解と説話……………木藤 才藏
——発心集と沙石集と徒然草——

——中世説話第二特集——

- 晴長明晩年の生活空間と往生の場……………原田 行造
——御堂関白道長の栄華・死と関連させて——
- 「発心集」の火車来迎説話をめぐって……………青山 克彌
「葵上」における死霊のイメージ……………西村 聡
——火車に乗った六条御息所——
- 美福門院と頼長……………竹村 信治
——今物語第一話人物考証・恣見——
- 花園左大臣源有仁の説話をめぐって……………藤島 秀隆
——「今鏡」・「古事談」・「発心集」の伝承——